

- 1 地下鉄の下に地下鉄あおみどろ
- 2 キョウチクトウ嫌いな人の名が綺麗
- 3 校歌っていつも嘘つき晩夏光
- 4 セロリ噛むひとつの恋を終わらせる
- 5 春風のすつとんきように救う罪
- 6 クリスマスまだ点いている倉庫の灯
- 7 鬱になるちよつと手前の白すみれ
- 8 円座という島にひとりや星を見る
- 9 反省の色ってたぶん石路の花
- 10 あめんぼが言うならここも海だろう
- 11 立春や封筒の糊まつすぐに
- 12 ただ咲いているだけなのに彼岸花
- 13 小寒やまた深爪をしてしまう
- 14 月涼し女子ってみんなエイリアン
- 15 菜の花が夜に埋もれず咲いている
- 16 コピー機の今日もうるさく今日も梅雨
- 17 あぶらぜみ言葉の意味を破壊する
- 18 人よりも猫は賢く望の月
- 19 罌粟を蒔く睡眠薬が効かなくて
- 20 廃校にピアノが残る二月尽
- 21 父子(おやこ)です鮫にわくわくしています
- 22 水芭蕉表彰式にいつもの子
- 23 すっかりと丸い消しゴム大晦日
- 24 寒鯉やダウンロードの待ち時間
- 25 ねこじゃらし性善説を信じたい

- 26 由来さえ分かればこれも盆踊り――
- 27 燕の子まだ雨の日を知らないで――
- 28 つくづくとパンダは熊の目付きかな――
- 29 なぜぼくはぼくなんだろう春の海――
- 30 そつと君メガネを外す神の留守――
- 31 手品師の一瞬真顔ほうせんか――
- 32 全世界共通語として風光る――
- 33 鍵っ子の鍵の重さや雪積もる――
- 34 夏草や手首にそよぐ友の傷――
- 35 紅葉かつ散る人それぞれというコトバ――
- 36 室の花真顔に戻るエレベーター――
- 37 古書店の百円ワゴンすべりひゅ――
- 38 春宵に画鋏でとめる写真かな――
- 39 白々（しらじら）と人に生まれて桃を剥く――
- 40 十三夜結びそこねた小指かな――
- 41 「Eureka」（ユリイカ）となぞった先に冬の蝶――
- 42 侵略のように向日葵畑かな――
- 43 雲の峰研究しないという自由――
- 44 夏至来る（きたる）まだぶらぶらとしていたい――
- 45 絶交のあとの身軽さ冬の浜――
- 46 葉袋の重さ変わらず鳥渡る――
- 47 卯の花腐し体育館にホイッスル――
- 48 フルートの肺活量で白鳥来――
- 49 ラムネ飲む空がしずかになっていく――
- 50 致死量に達するほどの夏の雲――

- 51 アイスティー飲みたく雨に降られたく――
- 52 青嵐下の名前で呼んでみる――
- 53 からあげはもう無くなって日は短か――
- 54 柚子実るみなごつごつの笑顔かな――
- 55 紫陽花や心療内科というコトバ――
- 56 霾るやラッシュアワーに同じカオ――
- 57 村雨や短所ばかりが思いつく――
- 58 百日紅ものすごいって嘘くさい――
- 59 履歴書に空欄多い夜長かな――
- 60 不機嫌な日にあたまから鰯食う――
- 61 教室で狼を飼う羊かな――
- 62 青春の青を勝手に染められて――
- 63 おそらくはボーイソプラノ銀やんま――
- 64 日々という風蝕に立つヒヤシンス――
- 65 歯みがきの仕上げに秋の空を吸う――
- 66 鉛筆を削りながらに春を待つ――
- 67 答え無き夏の一本道を行く――
- 68 蛍火や EDM の鳴る車――
- 69 桜って生まれながらに調律師――
- 70 万緑を一気に揺らすギターリスト――
- 71 正しさよヨットが暗い海わたる――
- 72 針の無い時計のように冬の池――
- 73 杉の花なみだのための嘘として――
- 74 台風が近づいている 手をつなぐ――
- 75 鼻歌とおなじ明るさシャボン玉――

- 76 「なぞなぞの答えのように蝶が来る」
- 77 「風邪引くや昼の時計をじつと聞く」
- 78 「とりあえずビールとりあえず生きている」
- 79 「人生はデッサン止まり冬バツタ」
- 80 「後悔に銀河の隅がふさわしく」
- 81 「行く末を知らずに駆ける豚の汗」
- 82 「冬ざれて世界はダンボールのなかに」
- 83 「荒星や一点足らず不合格」
- 84 「霜の華最後に笑ってくれました」
- 85 「かぶとむしあの頃バカと言ひ合えた」
- 86 「カラオケで人が死ぬ歌八月来」
- 87 「いままでの嘘のぶんどけ薄荷刈る」
- 88 「またねって言われたきりの無月かな」
- 89 「制服の白きゆうくつで夏木立」
- 90 「お互いに初めて私服さくらんぼ」
- 91 「空想に尾ひれが付いて夏の夜」
- 92 「頼杖で伏目でバレンタインデー」
- 93 「女郎蜘蛛の卵塊秘めるクラス委員」
- 94 「ふきのとういじめられっこいじめっこ」
- 95 「万物は水彩にして夏の朝」
- 96 「はだれ雪もつとも人を遠くさせ」
- 97 「素描という孤独な時間紀音夫の忌」
- 98 「鳥帰る卒塔婆のように並ぶ本」
- 99 「ドアノブはドアの向こうを知らず春」
- 100 「青き踏み証明写真撮る顔で」